

優秀賞（愛媛オレンジバイキングス賞）

「見えない病気向き合う」

西条市立西条北中学校　2年　矢原夕鈴

私は、年長からてんかんという病気と向き合っています。幸いなことに、今は、発作は起きていませんが、「いつ起きるかわからない。」という不安が、常に私の心の中にあります。

毎年続く検査はとてもしんどく、特に検査結果が悪かった時は、大好きなゲームも控えるように言われました。

リラックスできる大切な時間を奪われるような気がして本当に、辛かったです。

てんかんは、見た目ではわからない病気です。だからこそ、自分のことを周わりの人に話されるのが嫌でした。

特に、お母さんが先生と自分の病気について話しているのを聞く時は、自分の病気が「特別なこと」として扱われているようを感じ、その度に、私は他の子とは違う存在なのだと嫌でも意識させられていきました。

毎日飲まなければならない薬も、とても苦痛でした。薬は不味くて、飲む度に顔をしかめていました。

発作を防ぐためには必要なことだと分かっていても薬を飲む時間は私にとって、病気を思い知らされる辛い時間でした。

特に辛かったのは、学校のプールの授業でした。

みんなと一緒に泳ぎたいのに、先生はいつも私のそばにいてくれました。

みんなが楽しそうに泳いでいるのを見ているだけの日は、本当に羨ましくて、自分だけが違う世界にいるような気持ちになりました。先生が気にかけてくれているのは、ありがたいことだとわかっているけれど、そのことがかえって私を「普通」から遠ざけているように思えたのです。

そんなとき、私はこの辛さを信頼できる友達に話すことにしました。

病気のことを伝えた後、友達関係が壊れてしまうかもしれないという不安が、ずっと心の中にありました。

でも勇気を出して、こう言いました。

「実はさ、てんかんなんだ。プールで先生が付いているのも、

そのせいなんだよね。」と緊張しながらそう伝えると、「そっか。何かあったら言ってね。」と、ごく自然に受け入れてくれました。

特別な配慮をするわけでも、同情するわけでもなく、ただ私という存在をそのまま受け入れてくれました。

その一言がどれほど心強いものだったか、言葉では言い表せないほどでした。

その日を境に、私の生活は大きく変わりました。みんなと喋ったり、放課後に一緒に宿題をしたり、何気ない毎日をとても楽しむことができ、心が軽くなっていくのを感じました。

この経験から、私は大切なことを学びました。てんかんは、見た目では、わからない病気だからこそ自分から伝えるのは勇気がいります。しかし、勇気を出して伝えてみることで人は互いに支え合い、優しさという光を分け与えてくれる。

正直に言うと、私は病気のことをみんなに知られたくありませんでした。

でも、この作文を書くにあたって、自分の見えない病気の辛さをもっと知ってもらいたい。この病気を分かり合える世の中にいていきたいと強く思うようになりました。

私には、同じてんかんという病気と向き合っているお姉ちゃんがいます。

そして、目が悪くて障がいを持っているひいおじいちゃんもいます。

だから、私は見えない病気だけではなく、見える病気や障がいを持つ人にも関わって支え合っていきたいです。

私のように、世の中には、見える病気、見えない病気、障がいと向き合っている人がたくさんいます。

だからこそ、私はこの経験を胸に言葉だけではなく、行動で示せる人になりたいと強く思います。

困っている人がいたら、勇気を出して声をかけ支え合える人になりたい。

あの時友達がくれたように、私も誰かの心に寄り添い、光を分け与えられるような存在になりたいと思います。